

うえすとさいど第49号50号にまちかどサポーターに続けてご登場いただいた高月波子さん。ここではうえすとさいどには載せきれなかった先生のインタビュー全文を掲載します！
(インタビュアー：西田、木村、前川)

西田 高月先生には2013年のバリアフリーな街ふせで里親制度のことをテーマにご講演をいただきました。

前川 先生が自費出版された「縁を育む～養子縁組親子の道のり～」を読ませていただきたいときに、お話ししてほしいと思って講演をお願いしました。

この本に掲載されている子どもたちが僕と同じ世代ですよね、還暦を迎えるくらい。

高月先生（以下敬称略） この本は2012年10月に発行しました。ほんとはね、これの後も書きたかったの。その中の子どもたちで亡くなっている子もいてね。だけどもう体と頭が動かなくてね、口は今の所動くんだけど。

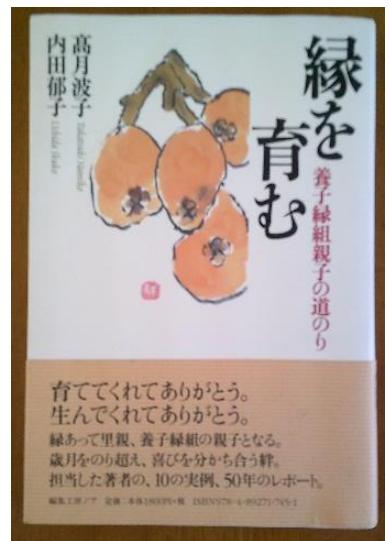
西田 この本を読ませてもらって驚いたことが多かったです。養子縁組した後のご家庭の歴史を書かれてて、親子って、血のつながりってなんやろうと考え込んでしまいました。この本を書こうと思ったのは、どういう思いだったんですか。

高月 養子縁組をした子どもたちが大きくなった時に、育てられたことをどう思っているかということを聞きたかった。というのは、(養子縁組をした子の中には)生みの親について全く分からぬ子もいる。ある時その中のひとりの子が児童相談所に来てね。「何で僕はあんな家にいったんや」と。養父母の方はごく普通な方で、子どもは頭が良かった。その子には「今育ててもらっているお父さんお母さんが、他の子でなくあなたを欲しい。あなたもお父さんお母さんと会って（この家に）行きたい、とそういう思いがあったのよ。」と伝えました。

そんなこともあって、子どもたちが本当に満足をしているのかということを知りたかった。また養子縁組の相談員をする後輩たちにこの本を通じて知って欲しいと思った。児童相談所のかかわりは養子縁組ができたら終了してしまう。当時は小学校入学や卒業など節目に里親さんが、成長した子どもの写真や手紙を送ってくれることもあった。相談者は最初に関わったワーカーに相談しやすいこともある、その後の関わりを持っていた。何かあったら相談にどうぞという感じで。私が児童相談所から離れた後も年賀状のやり取りをしていたケースもありますね。

西田 今も続いている方はいるんですね。

高月 はい、それで出版もできたの。だから個人情報云々というのはいいようでどうかと思うところもある。情報の公開ということも大切でしょ。情報はやっぱり共有したい。



西田 私も今こういう仕事をしていて、例えばふせまちかど相談所の契約が切れてしまった利用者さんのことが気にはなっても、契約切れてるのに家行くとかはできないし。例えば、退職した後、その利用者さんと縁をつないでいくというのは、すごく難しい。個人的につながるというのは、ダメだっていう時代になってしまって。福祉の仕事に関してはそれだけでは取まらないことってあるなって思います。

高月 その代わりしんどい時もあるのよ。いろんな悩み相談の電話がかかってきたりしてね。普通なら、「それは担当ワーカーに言うて」って言えるんだけど、福祉の仕事というのは人と人との関りでしょ。そうしたらクライエントにしても担当者が変わったりすると、あのワーカーだったら話せるけれども、今度のワーカーだったら話せないって人がいるの。クライエントにとっては一番最初に関わったワーカーとの信頼関係がある。役所というのは移動などでワーカーが変わっていくでしょ。だからいい面と悪い面があってね。クライエントにすると一番最初に関わったワーカーに、愛着というか信頼を持ち、移動等で新しくなったワーカーとの信頼関係ができにくいケースもあるのよ。

当時の大阪市の児童相談所の所長は精神科の医師で専門家を育てるうえから、あまり転勤がなかった。私がいたころは、大阪市の児童相談所の職員になりたいという



人が、たくさんおったわけ。だけど今聞くところによると、「今の児童相談所は仕事が大変だから、早く児童相談所を辞めたい。」って。私が勤めていたころは、「大阪市の児童相談所はいい仕事しているから、児童相談所に就職したい。」ということで、大学のゼミの先生が、「こういう学生がいるから試験を受けさせてくれ。」って、推薦があったと聞いています。最近は虐待など深刻なケースが多くて、困難事例に対応をしていくと思うと、横つながり、いろんな職種の人との横のネットワーク、それが大切よね。ふせまちかど相談所もそうでしょ。

西田 クライエントの思いを聞いていても、私だけではやっぱり何もできなくて、それをちゃんとそれぞれのサービスにつないでいく。地域の中でそれを担っていく人たちをみつけていく。一人の人に対して応援してくれる人を増やしていくというのが私たちの役割ですね。それをするためには日ごろからつながりがないとできないことですね。

高月 その時と今では相談内容が違うかも知れないけど、やっぱりスーパーバイザーがちゃんとした人であるということが大切。スーパーバイザーがおるってことが、すごく力になるし、勉強にもなる。ふせまちかど相談所なら前川さんがスーパーバイザーしてくれる。

西田 (高月先生が) 勤めていたころは、その精神科の所長がスーパーバイズをしてくれ

ていたんですか。

高月 そうですね、スーパーバイザーもしてくれていました。

こんなこと言っていいのかどうか、今、行政を見ていると、効率、効率と言うでしょ。やっぱり人間社会、社会生活する上では効率も大切だけど、プラスアルファが必要なのよ。無駄というか余裕というか。私の時は勉強しようという時間があった。今のケースワーカーは勉強するような時間がないみたいね。カンファレンスやスーパーバイズの場があれば、それだけでも勉強になるわけ。そういうのを、もっと持たないと。効率一辺倒の世の中ではいい人材が育っていくのか心配です。

西田 先生は大学を卒業して最初から児童相談所に行きたいと思われたんですか？

高月 私は学生の中でできない学生でね。卒論のテーマが里親だったからゼミの先生から「そしたら児童相談所行くか。」って言われてね。自分の意志よりも肩を押してくれる先生がおったからね。卒論のテーマも何していいかわからないし。ほんなら「お前はこれ（里親）せえ。」って。「これから福社は集団よりも個人や。」「ほなそうします。」って全部従ってきただけなの。

前川 そのゼミの先生が岡村重夫先生ですよね。私たちにとっては社会福祉士のテキストの最初に出てくる先生、という印象ですが。

高月 岡村先生が偉い先生というのに、自由に家に遊びに行ったりね。余談話になるけど、信州の安曇野に別荘を持っておられて、友達と一緒に行ってね。今考えたら…岡村先生が薪でお風呂の湯を沸かしてくれて入ったこともある。今、考えたらおそれ多いことだった。だから私はできの悪い学生だったけれども、まあ、かわいがってもらった方だったの。

西田 岡村先生の勧めで児童相談所に勤めることになって。

高月 昭和31年11月法改正で児童福祉行政も指定都市に移ることになり、大阪市に児童相談所が開設され、それにともなって職員が必要となった。それで応募したわけ。その時に大阪市の児童課に配属されて、最初の仕事は里親等の委託費の計算だった。

私は計算は苦手。そろばんなんか使ったことがない。もうねえ、措置費がいくらとか、先輩なんかはさっと計算するけど。私は全くできない。当時は電卓もなくて、とにかく数字に全く弱くって。

その頃はお手洗いも女性男性一緒なのよ。そういう時代だったの。女性はね朝、みんなが出勤する前に行って、お湯沸かして、お茶をいれる。みんなそれぞれ湯呑が違うわけ。それを覚えて。お昼がきたら、洗ってまた出す。お客様来たら、お客様にもね。それがね、仕事をしていたら、そんなことできない。でも先輩はもうささつとするのよ。係長が、「高月さん、先輩がするのを、あんたもちょっと見習ったら。」と言われたりもしました。結局、課長が見るに見かねたんやと思うわ、児童相談所に転勤させてくれてね。児童相談所では、男の人も女の人も一緒に掃除もしていた。もうほんとにうれしかった。



西田 それは児童相談所が出来たところだから、そういうシステムになっていたんでしょうか？

高月 そうそれもあるね。

西田 その頃の児童相談所は女性が割と多かったんですか。

高月 多かったように思うね。半々とまではいかないかもわからんけど。

前川 「バリアフリーな街ふせ」で先生にご講演いただいたときに、来場いただいた人の中に、「自分は実は里子やった」とか、「親戚に里子を育ててる、ご兄弟が子どもいなくて、里親になって子ども育てる」という人が結構いました。あの時、スタッフとして関わってくれた方は先生の本買ってはって、この人福祉に興味あるのかな、と思ったら、帰り際に「実は私も（養子）なんです。」って言ってくれました。

布施の商店街とかで仕事をされている方々の中にも、施設で育ちましたみたいな人も結構いるみたいで。そういう人はこういう話はあまり聞けないのでやっぱり聞きたいと思いますよね。

高月 私は養子です、とはなかなか言わないですよね。

西田 この本の中で、養子縁組の時に、子どもの出自の話をできるだけ早い時期に伝えてあげなさいという指導しましたって書かれていました。私はそれにびっくりして、その辺は里親に任せますって感じなんかと想像していました。

高月 これは私の経験だけど、小さい時に何かいたずらをすると、おばあちゃんから橋の下に捨てに行くと言われたの。そしたら、私、橋の下からもらわれてきてるのかと、子ども心に思うのよ。そういう言葉というのは子どもにね、マイナスなイメージを与える。というのは、自分の体験で思っていた。私だけもらわれてきた子か、親やおばあちゃんのそういう口ぶりから、そう感じた時があったわけ。

それからスーパーバイザーの所長が、当時の外国の文献にも、生まれた時からちゃんと事実を教えないといけないと書かれていたと話してくれた。自分の経験からも言われたことがトラウマになっていた。だから事実は事実として教えないといけない。子どもは小さい時から、「どうやって生まれたの？」という質問はするじゃない。だからその時に本当の子どもであれば、事実を言えるけど、そうじゃなかったら、「違う」ということをなかなか言えないわけよ。

その時にごまかしたらダメなの。実の子どもじゃないということをね。ごまかしたら、ずっとついて回るからね。1歳なら1歳、2歳なら2歳にわかるぐらいの言葉でいいから、やはり事実は事実として伝えないといけない。子どもが質問してきたときには事実を言う。それが難しい言葉だったら、子どもはわからないから、子どもの年齢に応じた言葉でね。これは性教育と同じ。



こんなこともあった。里親さんが小学校に入る前くらいの時子どもに、「あんたお母さんから生まれたんと違う。生んでくれたお母さん別におる。」って言って。子どもも「ああ、そう。」と全然抵抗なかった。3歳か4歳くらいやつたら。大きくなつたら悩むけれども。小さい子は、「ああそう」で済む。そしたらその子が隣の家に遊びに行った時に、「あんたのお母さんどこにおるの？」と言ったんだって。「ここにおるやん。」って言つたら「違うやん。もう一人のお母さんやん。」ってね。だからその子は、お母さんから「私はあなたのお母さんだけど、あなたを生んだお母さんはもう一人おるのよ。」と言われた。すると、どこもそうだと思って。お隣に行った時に「もう一人のお母さんどこにおるの。」って聞いたみたい。

西田 それがその子のベースになるんですね。

高月 その本に掲載されている子の中には事実を全然教えてもらっていない子もいるのよ。だけど、どっかで感じてたのよ。事実を隠していたことが原因かどうかわからないけど、いろいろなことがあってね。

今は特別養子縁組があって、戸籍の上にはちゃんと親の欄には親の名前があるけど、その当時は、置き去りにされた子なんかの場合は実の父母の欄は空欄なのよ。里親は、養母、養父で記載をされる。今は特別養子縁組で、父母欄に養父母の名前が記載されるようになった。

当時こんなケースもあったわね。生野区内で見つかった子は、生野道子って名づけられた。生野区の道路に置き去られてたから。それを聞いたときはもうちょっと何とか考えれたらいいのにと思ったわ。戦後すぐで貧しい時期には赤ちゃんを抱えた女の人が「ちょっとトイレ使うから。」って他人に赤ちゃんを預けてそのまま逃げてしまふこと也有った。その子のつけられた名前が、梅田一（はじめ）。大阪駅の住所が梅田一番地だったからね。その子にかかわったものとすれば、もうちょっとなんとかしてよって思ったね。児童相談所で関わった孤児のみんながみんな里親のもとにいくとは限らなくて。施設で成長して巣立つ子もいる。大きくなって自分の生き立ちを知りたいと児童相談所へくる子もいる。自分のルーツはみんな知りたいわけ。でもやっぱりワーカーとしては伝えていいことと悪いことがある。成人式を迎えたときや結婚をするときに恋人と一緒にとか、人生の節目で来た子がいる。そのときに捨てられたということはマイナスなイメージになるでしょ。だから私は、「お母さんはあなたを置き去りにすることによって、あなたを助けたんだ。」と言ってきました。

「お母さんはあなたの命を助けるために、あなたをそこに置いて、あなたの命を助けた。ひょっとしてお母さんはその後、病気で亡くなったかもしれないけれども。あなたの命を助けるために、あなたをそこに置いたのよ」って。



西田 この本の中でも、育ての親御さんに感謝されている方は、生みの親御さんにも感謝されているなど感じました。どんな始まりであったとしても、今ここから先が幸せだったり、過去に幸せな思い出があったりすると、始まりにも感謝ができるのかなと本を読んでいて感じました。私たちの仕事でも一緒にやなと思います。これまでにいろんなことがあって、誰かにサポートしてもらうとなったとしても、そこから出会えた人によって、人生がちょっとでも変わっていけば、そこまでの自分を認められるというのは、何か共通するものがあると思いながら読ませていただいて。そこを育んでいく里親さんの思いの深さやご苦労も感じました。またそれをバッタアップしていく児童相談所の職員さんとかというのは、他人の人生に関わっていって、自分もどこか巻き込まれながら支援していくかなきやいけない、とても大変な仕事だと思います。先生は児童相談所で何年勤務されたんですか。

高月 教育委員会等で仕事をしたこともあったけど、結局また児童相談所へ帰って、58歳で退職しました。

西田 30年ぐらい児童相談所で仕事をされたんですね。

木村 私は結婚が遅くて、でも子どもは欲しかったので夫と里親について話をすることがあります。結局は年子で二人できたんですけど、最初は「三人ぐらい…」と思っていたので夫に伝えるとそのときは「もう二人いてるやん。」という話になって。実母にも同じような話をしたときに「そんなどこの子かもわかれへん子、大変やで。」と言われました。実母ですらこの様子で、これを夫の父母に理解をしてもらうということは大変なことやな、と感じました。

高月 子どもを引き取るとご夫婦で決めたときに、それぞれの親戚に対してご主人は奥さんの遠縁の子どもをもらうと、奥さんはご主人の遠縁の子どもをもらうと、伝えた夫婦がいました。私たちが事実を伝えてほしいと言っても、それ以上の干渉はできなかつた。それはご夫婦の問題やから。中にはおじいちゃんおばあちゃんがね、やっぱり自分の子どもと、もらってきた子どもに対してはえこひいきがあるというのも聞いた例があります。

西田 夫婦の間に子どもができるって、おめでたいことなのに、血のつながりがあるかないかで、こんなに周りの反応が違うというのは、悲しい話ですよね。ちゃんとした手続きを踏んで、自分たちの所に縁あってくれた子と、妊娠という過程を経て生まれた子との違いって、どこまであるんかなと思います。

前川 障害児の相談をしていて最近は家庭が複雑化していて、前の夫の子どもとか、かなりの割合でそういう複雑な感じの家庭が増えていますね。

お父さんが後から入ってきて、お父さんが頑張りすぎて、そのお父さんが思っている父親像はものすごく厳しくて、子どもとうまくいかなかったりということも結構あるみたい。



高月 里親の場合はね。もうときは障害があるとはわからなくて後でわかって、ものすごく恨まれたことがあった。大阪市の児童相談所としては、できるだけ小さい時に関りをもってもらって、そこで親子関係育んでもらって、約半年過ぎて、養子縁組を勧めてるのね。あるケースで、養子縁組済んで1年ぐらいして、目が見えないまではいかないのだけれど、弱視ということがわかった。それでね、ご主人が「養子離縁したい。」というの。「障害児を紹介した。」と言うて来たのよ。その時に、「この子をあなたたちが、望んで養子に迎えた。この子がほしいという強い気持ちがあったでしょ。子どもを産む場合でも、両親の合意で子どもつくるのだから、もう場合でも夫婦が、合意でその子を選んだ。「ふたりで、このお子さんを選んだんじょ。それでも離縁するの。」ってね、私は返したんだけど。その後どうなったのかわからないけれどね。奥さんは、その後、「今まで主人がちゃんと帰ってきてたのに、障害が判ってから帰りが遅くなった。」と愚痴を、言いに来たことがあったわね。「確かに児童相談所は紹



介はしたけれども、子どもを選んだのはご夫婦で。後になって子どもに目の障害があるってことが分かった。養子を離縁するかどうかは、またご夫婦の判断だけど。選んだということについては、夫婦で選んで、子どもができたのよと。実のおなかから生まれた場合でも、そういうことあり得るでしょう。」てね。そういうふうに話したことがある。それがほんとにお腹を痛めた場合ともらってきた場合との差かもしれない。

木村 離縁というのは、役所行って手続きをするんですか？

高月 親のいない未成年の場合は、後見人を立て裁判所に申し立てをします。このケースはその後どうなったかはわからない。でもいいケースばかりじゃなくて、いろんなケースがある。最初に話をした子のように養子縁組したあと「何で僕はあんな家にもらわれたのか。」とか「もう少しいいお家へもらわれて行きたかった。」とか、そんなこと言いに来た子もおったわ。実の親子でもあるじゃない。「何で私この家に生まれてきたん。」ってね。

前川 今は「親ガチャ」って言いますよね。親って結局えらべない、ガチャガチャと一緒にやみたいな。「親ガチャでうちは外れや。」みたいな表現をしますね。

西田 養子縁組や児童相談所のお話たくさん聞かせてもらいました。58歳で退職されてから、南海福祉専門学校で校長先生をされたと聞きました。

高月 南海福祉専門学校には58歳から68歳まで10年勤めました。

前川 私が講師として就職をしたときの先生方は本当にいい先生たちが集まっていた。あのドリームチームは高月先生の作品のように思います。

高月 実を言うと私ね、学校やから、夏休みある、そしたら旅行もできるってそういう甘い考えだったの。でも夏休みになると、学生が施設実習に出る。いろんな施設に行く。そしたら施設からクレームが入る時がある。「何であんな学生をよこしてくれた。」と。

「勉強できんでもいい、挨拶をちゃんと教えてくれ。施設に来ても朝、おはようも言わんとすぐ、自分の持ち場に行ってしまう。帰る時は帰りますといわずに帰る。挨拶を教えてください」って、言われたの。ショックだったわ。学校としては実習先でいろんな技術や対応を学ぶと思ったら、それ以前だった。施設では禁煙なのに煙草を吸っているといわれたこと也有って。そういうクレームが入ったときに先生たちは実習巡回をしているから、私がとんでいかないといけない。夏休みがあると思っていたのに誤算だったわ。

前川 私が南海福祉専門学校に行ったときには先生が誰よりも一番働いてはりましたね。

先生、顔が広いので謝罪に行くのも先生じゃないとダメなところもありました。

高月 役所に勤めていたからね、いろんな福祉施設との関りがあって、顔なじみの施設長もあって、ずい分助けられました。

前川 謝るとき、先生一緒に行ってもらわなかったら、私たちではたちうちできないこともありました。

高月 一緒に行ったときに教員が大きい顔していくからね。焦ったわ、頭下げて入って行ってね。私、行った時一番びっくりしたのはね。教員がね、ジャージ姿で授業している人がいたのよ。先生の服装がね、あんまりにもラフすぎてびっくりしました。

それと、一つピーアールしときたいの。私ね、大学生の時、ガールスカウトに入ったの。今はガールスカウトに籍だけ置いてるの。ガールスカウトには誓いがあってね。神と国に対してつとめると誓うの。でも私はクリスチヤンでもないから、と断った。でも神っていうのは自分の信じるもので仏教でも自然でもいいと説得をされて、入ることにしたの。それがいまだに続いているの。

西田 先生自身が幼い時に始めたんですか。

高月 学生の時にね。地域でガールスカウトを作りたい、というおばさんに勧められて、学生が比較的時間があるから、ガールスカウトのリーダーになってほしいって言われて。それが、いまだに続いているの。

昔は夏になると子どもたちをキャンプに連れて行ったりしてね。

その仲間との縁がずっと続いているの。職場のつながりは切れたりするけど、ガールスカウトの仲間とはずっと続いている。何でかなと私思うのね。私は泉大津で育って、今もそこに所属をしている。活動はしていなくても毎年登録はしている。会費を納めて。その人達とずっと縁がある。ガールスカウトは、いわゆる社会教育の分野で、少人数を単位に活動してる。個人じゃなくて、グループで活動するわけね。グループの中にはいろんな人がいる。お互いに助け合って一つのことを達成する。力を合わせなきゃいけない。そういうものに魅力を感じてるの。ガールスカウトの中には、一人が目立つんじゃなくて、グループで行動して、グループで一つのもの



を完成するという、グループ意識というかな。だから、中には知的障害の人も入ってる場合もあるし、足の悪い人が入ってる場合もあるけど、その人と一緒に行動する。そういうことに、共感できたのかなと思ってね。

私は泉大津の団に登録していて、この前70周年を迎えた。いろんな人に助けられてここまで来ました。あなた達と違って、結婚していないから、子どもはいない。でも色々なところに多くの子どもがいるように思う。ガールスカウトのご縁もあるし、職場のご縁もあるし、近隣のご縁もある。いろんなご縁で助けられてきました。そのご縁を大切にしたいと思います。

西田 作り上げてきた縁とか、つながりというのがすごく多岐にわたっていて驚かされます。貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。